# 階層化しない社会のしくみ

## ――パプアニューギニア・クボの場合――

須田　一弘*

ホモ・サピエンスが登場してから約20万年のうち、国家は約 5 千年前に「発明」されたに過ぎず、1 千年前まではほとんどの人類は国家とは無関係に生きてきた。また、つい最近まで、国家と関わらずに暮らしてきた社会もいくつもあった。そうした中には、階層化しない、平等主義的な社会も含まれる。そのうちの 1 つであるパプアニューギニアの熱帯雨林に暮らすクボは、サゴヤシ利用・移動式農耕・狩猟・採集・漁撈により周囲の環境から食物を獲得してきた。一方、その生活は強い平準化志向に貫かれており、それは、資源利用における柔軟性（非所有者への利用権の拡張）の他、姉妹同時交換婚や邪術に基づく死の概念などにもみられる。クボが植民地政府と関わるようになったのは1961年からであり、それまでは平準化志向に基づく平等な社会を作り上げてきた。それらを分析することにより、階層化しない社会のしくみとは何かを考えたい。

キーワード

非階層化社会、民族誌、平準化、クボ

目次

Ⅰ　問題の所在
Ⅱ　クボと調査地シウハマソン
Ⅲ　シウハマソンの資源利用とその特徴
Ⅳ　交換と平準化、そして邪術
Ⅴ　資源利用と平準化志向、邪術との関わり
Ⅵ　平等社会への生態人類学的視点

## Ⅰ　問題の所在

現代では、世界のほぼすべての人びとが近代国家に包摂されて暮らしているが、ホモ・サピエンスが登場してからのおよそ20万年のうち、国家は約 5 千年前に「発明」されたに過ぎず、1 千年前まではほとんどの人類は国家とは無関係に生きてきた（スコット 2017）。そして、つい最近まで、国家と関わらずに暮らしてきた社会もいくつもあった。パプアニューギニアの熱帯雨林に住むクボも、その 1 つであり、とくに、国家の前提となる階層化のない平等な社会であった。クボが植民地政府と関わるようになったのは1961年からであり、それまでは差異の顕在化を極力防ごうとする平準化志向に基づく平等な社会を作り上げてきた。そのメカニズムを分析することにより、階層化を作らない社会のありかたを生態人類学的視点から考えたい。

階層化しない社会、すなわち、平等社会について、アフリカの狩猟採集民ハッザの調査を行ったイギリスの人類学者であるウッドバーン（Woodburn 1982）は食料生産システムとの関連から論じている。彼は、多様な食物獲得活動を、狩猟採集社会の多くでみられる

* 北海学園大学

ような、投入した活動に対してすぐに見返り（食物の採捕）が期待できる即時収益システム（immediate-return systems）と、それ以外の社会における、活動の投入からその見返り（食物の収穫）まで一定の時間の経過が前提となり、かつ、食物の貯蔵や富の蓄積が可能であるような遅延収益システム（delayed-return systems）に大別し、平等社会（egalitarian societies）の前提には即時収益システムが不可欠であると論じた。ウッドバーンが即時収益システムに基づく平等社会の例としてあげているのは、ムブティ、クン・ブッシュマン、パンダラム、パーリヤン、バテッ、ハッザの6つの社会である。その中でもとくに、リー（Lee 1979）やマーシャル（Marshall 1976）が調査したクン・ブッシュマンと、自分自身が調査を行った（Woodburn 1970等）ハッザの事例を多く取りあげて、これらの社会の平等主義的特徴をまとめている。

ウッドバーンが平等社会の基本的特徴としてあげているのは、以下の4点にまとめることができよう（Woodburn 1982: 434）。すなわち、1）社会組織の柔軟性とその編成の継続的変化、2）居住、食物獲得、交易、交換、儀礼における個人の選択の自由、3）（生存のための）基本的要件へのアクセス権を他者に依存しないこと、4）親族を含む他者との関係が分配（sharing）と相互関係（mutuality）に限られ、かつ、それが長期的なコミットメントや依存を意味しないこと、の4つである。彼は、これらの平等主義的特徴が、即時収益システムにおける技術や労働の過程、所有規則の副産物ではないとしながらも、その生産システムに分かちがたく結び付いたものであるとしている。さらに、これらの社会にみられる遊動的生活、資源利用の柔軟性、権力の欠如、分配、私有財の蓄積の否定とその循環等にみられる平準化メカニズムを例示し、富や権力、地位といったものにおける差異の顕在化が即時収益システム社会の脅威になると論じている。つまり、平等社会にとって、日常生活の折々に表れてくる差異の顕在化を平準化するための仕組みが重要な意味を持つことになる。

しかし、この見方は、社会を環境と食物獲得活動の関数と捉えるものであり、人間の環境や諸活動に関わる諸観念が社会の形成に及ぼす影響を軽視しているといえる。たしかに、ウッドバーンのあげた6つの社会においては、即時収益システムと不可分に結びついた平準化メカニズムが平等主義的特徴をもたらしていることは否定できないが、遅延収益システム社会においても、極端な平準化メカニズムが作用する場合もある。本来、遅延収益システム社会では、その生産システムの特徴から、富や権力、地位における差異の顕在化を促進する方向に向かう傾向はあるが、他の要因がそれを阻害する可能性もある。たとえば、掛谷はアフリカ東部でトウモロコシとキャッサバを主作物とする農耕を基本的生産システムとするトングェ社会において、他者からの妬みとその結果生じる邪術への恐怖に支えられた極端な平準化メカニズムにより、消費する食物が分配され平均化する傾向について論じている（掛谷 1983、1994等）。バナナを主作物とする移動式農耕（焼かない焼畑）とサゴヤシからのデンプン作りを生業の基盤とするクボは、ウッドバーンの分類に従えば遅延収益システム社会に分類される。しかし、そこでみられる政治的リーダーの欠如と強い平準化志向は、即時収益システム社会とよく似た特徴を持っている。クボの平準化志向は、狩猟採集という生業に起因するのではなく、彼らの超自然観、具体的に言えば妬みによって引き起こされる邪術への恐れによっている。いわば、平準化のオブセッションとでも呼ぶべき観念が存在しているとみなすことができる。

後述するように、かつての半遊動的生活、資源利用の柔軟性、政治的リーダーの欠如、葛藤を解決するための離合集散、分配等にみられるクボ社会の平等主義的特徴は、狩猟採集社会とよく似ている。しかし、このような特徴は狩猟採集社会のみにみられるとは限らない。スコット（スコット 2013 [2009]）は、大陸部東南アジアの丘陵地帯、いわゆる「ゾミア」には、低地の中央集権的水稲国家に抵抗する、あるいはそこに組み込まれることに抗するために、狩猟採集・移動農耕などの生産手段を選択した人びとが存在することについて詳しく論じている。そして、国家形成と収奪にできるだけ抵抗できる地勢、生業戦略、社会構造の設計について、「『地形の障壁』が高く険しい人を寄せつけない景観を編みだすだろう。また一斉に収穫できる穀物を集中させずに、むしろ耕作地を移すことができる、多品種で、分散し、成熟期間が異なる根菜類を好むだろう。さらには定住地をもつ固定的な政治体制ではなく、広く点在し動き回ることのできる居住形態、そして容易に分裂しては再結成できるような流動的で特定の指導者をもたない社会構造を考案するだろう」（スコット 2013 [2009]: 181）と指摘している。そして、これらの特徴は狩猟採集と移動（式）農耕という生業戦略に結びつけられている。まさしく、ゾミアでは人

びとの営為の結果として、平等を生成し維持するしくみが生み出されたといえる。以下では、クボの資源利用とその特徴及び邪術をめぐる超自然観についてまとめ、それらがどのように結びついているのかを明らかにしたい。まず、次章ではクボと外部社会との接触の歴史を中心とした民族誌データを紹介する。次に、資源利用とその特徴である柔軟性について記述し、交換と邪術が平準化志向に強く関連していることを明らかにしたい。

## II　クボと調査地シウハマソン

クボは、パプアニューギニア最大の河川であるフライ川の支流、ストリックランド川中流域に暮らす、1988年の調査時の人口が約500人の言語集団である（須田 2021）。1985年と1986年にクボとサモの人口を調査した大塚は、人口密度を 1 km$^2$あたり1.4人と推定している（Ohtsuka 1987）。ただし、この数値はクボとサモを合わせたものであり、また、後述のグワイマシのような北部のクボの集落は含まれていないため、実際にはこれよりも低いと考えられる。クボが生活する環境は海抜標高がおよそ100～200m にあり、ストリックランド川流域の熱帯雨林に覆われている（図１，２）。年間を通じての季節的変化はほとんどなく、ほぼ連日のように雨が降るため、年間降水量は6,000mm を超えることもある。西側にはストリックランド川が流れ、南側には低湿地帯、北側と東側には急峻な山々がそびえているため、以前からその範囲を超えた地域との接触はほとんどみられなかった。クボの生活は、東はヘラ州のシサ山と南部高地州のボサビ山の山麓から、西は西部州のストリックランド川にかけての大パプア台地に暮らす、いわゆるストリックランド・ボサビグループの人びととの接触に限定されていたといえる（Shaw 1996）。

ストリックランド・ボサビグループには18の言語集団が属し、言語学的には全体で基本語彙の20％以上を共有していることが報告されている。とくに、クボ、サモ、ホニボ、ゲブシ、オイバエの５集団の言語は、文法や語彙がきわめて似通っている（Shaw 1986: 70–73）。また、文化的特徴も、数家族が共住し数年ごとに移動を繰り返すロングハウスでの生活や、政治的なリーダーの欠如、集団間及び集団内の戦闘状態の蔓延など、多くを共有している（Knauft 1985）。

クボを含むストリックランド・ボサビグループの集団が植民地政府と初めて接触したのは、1934年から35年にかけて行われたジャック・ハイズとジム・オマリーによるストリックランド川・プラリ川源頭域踏査探検の折りである（ハイズ 1970 [1936]）。この探検行でハイズは、フライ川河口からその支流のストリッ

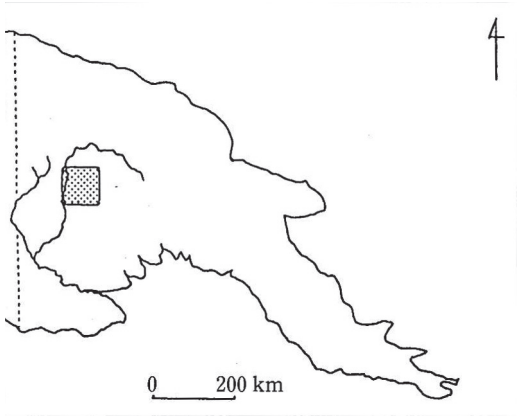


図１　クボが暮らす大パプア台地

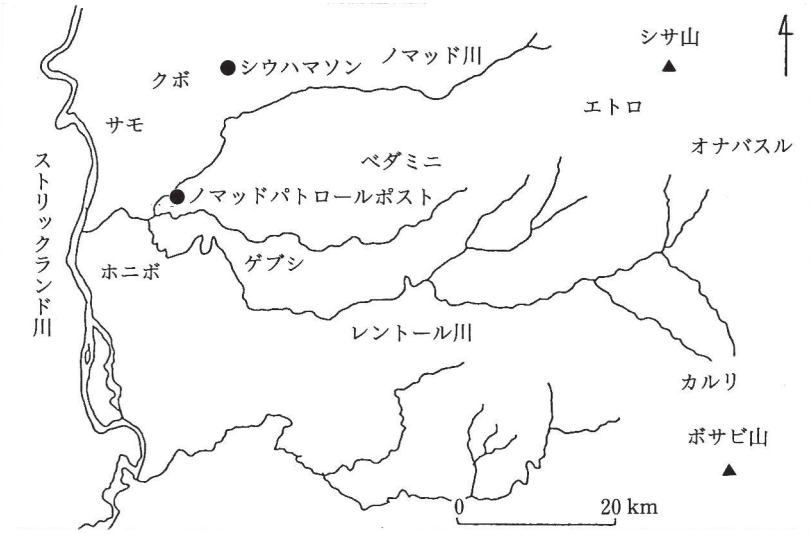


図２　大パプア台地の拡大図と主な集団

クランド川に入り、さらに支流をいくつかさかのぼって、現在のヘラ州に住むフリ集団と出会う。さらに、そこからプラリ川源頭部を目指すが石灰岩壁に阻まれてかなわず、キコリ川支流から河口のキコリへと下った。この途中、1935年の2月から3月にかけて、彼らはストリックランド川支流のレントール川をさかのぼり、大パプア台地を横断した。

ハイズは、ストリックランド川中流域から上流にかけては無人地帯であると思っていたようだが、ストリックランド川のさらに支流から高地へと進むうちに、ストリックランド・ボサビグループのいずれかの集団と出会うことになった。この出会いは、ほんの一瞬のことであり、探検行の記録にもその後高地で接触することになったフリとのような詳細な記述は残されてはいない。しかし、定住せずに遊動（nomadic）的生活をおくっているというストリックランド・ボサビグループの人びとに対するハイズの印象が、そのままこの地域の地名となり、ここを流れるストリックランド川の支流はノマッド川と名付けられた。ハイズが接触した集団はクボではなく、ノマッド川の周辺に住むホニボかゲブシ、もしくはベダミニと思われる。というのも、クボの側にハイズとの接触をうかがわせるような伝承は残っていないからである。クボが初めて白人と接触するのは、1961年にノマッド川南岸に植民地政府の出張所（パトロールポスト）が設置され、周辺集団の管理と宥和が図られてからになる。出張所には2～3人の白人の行政官（パトロールオフィサー）が常駐し、周辺地域への巡回を通じて、植民地政府への帰順と定住集落への移行を促した。

この地域の各集団にとっては、兄弟関係に基づく数家族が暮らす大きな家、すなわちロングハウスが自律的集落を意味していた。人びとによれば、それまでこの地域の集団間及び集団内では、殺人とそれに続く食人を目的とした襲撃が横行していたという。また、ゲブシを調査したノフトも、同様のことを報告している（Knauft 1985）。襲撃の原因となったのは、女性や資源をめぐる葛藤や邪術をかけたことへの疑いが主なものであった。そのため、各ロングハウスは他ロングハウスへの攻撃や、襲撃からの防御のため、いくつかのロングハウスと友好的な関係を結ぶ必要があった。各ロングハウスの人口は30人程度であり、主として他のロングハウスとの女性の交換によって同盟関係を結び、その紐帯は、通過儀礼など儀礼時の訪問によって確認され強化されていった。

ロングハウスは、邪術が原因とされる成員の死亡による分裂や、襲撃を受けた友好的ロングハウスからの避難者の流入などでその構成をしばしば変え、また、襲撃への恐れや畑の耕作サイクルなどにより、2～3年ごとに場所を移動していた。植民地政府は、こうした遊動的生活の主たる原因である襲撃の横行を鎮めることにより、定住集落への移行を促したのである。

当時、植民地政府に武力をもって抵抗していたのは、18の言語集団中最大の人口を有するベダミニであった。ベダミニから幾度となく襲撃を受けていたクボは、白人行政官の巡回を友好的に受け入れたようである。白人行政官のすすめやベダミニからの襲撃に備えるため、南部に居住するクボは1970年代半ばから、それまでの数家族からなるロングハウスでの遊動的生活から、家族ごとの小さな住居からなる定住集落を形成するようになった。筆者が1988年と1994年及び2003年に調査を行ったシウハマソンも、このようにして形成された集落である。また、いくつかの定住集落では、サモとの混住もみられるようになった。

1975年のパプアニューギニア独立によって白人が行政職から撤退するのに伴い、ノマッド政府出張所に常駐していた行政官も白人からパプアニューギニア人に代わっていった。これらの行政官は高地や沿岸部出身者が多く、行政に関わる教育を受けた人びとであった。パプアニューギニア政府は、ノマッド出張所の周りに、周辺地域で暮らす住民へのサービスとして学校や保健所を設立し、また、貨幣経済の浸透を図り、あわせてこの地に派遣された教員、役人等への食物の確保のために、ローカルマーケットを開いた。このようにして、10年ほど前にはロングハウスすらみられなかったノマッド政府出張所の周囲には各種施設が建てられるようになり、それらに引き付けられるように周辺から人びとが集まるようになった。現在ではノマッドには白人は居住していないが、周辺集団の人びとにとっては、ここが外部と接する結節点となっている。

また、植民地政府の出張所設立に少し遅れて、キリスト教プロテスタント系各宗派の宣教師がこの地域で布教をはじめるようになった。キリスト教各宗派は、ストリックランド・ボサビグループの呪術的な行為や儀礼を改め、キリスト教への改宗をもとめた。それと同時に、小学校や小さな商店を設立し、教育の普及と貨幣経済の浸透を図った。

ノマッド政府出張所のまわりに暮らすストリックランド・ボサビグループの各集団にとって、1960年代

からの植民地政府及び1975年の独立後のパプアニューギニア政府との接触、そしてキリスト教諸宗派による布教は、彼らの生活に大きな変化をもたらすことになった。まず、襲撃の停止と、それに続くロングハウスでの移動性の高い生活から集落での定住生活への変化は、彼らの社会的交渉を大幅に増加させることになった。それまでの日々の交渉は同じロングハウスに暮らす親族や親しい友人に限られ、また、その枠を越えた交渉も通婚や同盟関係にあるロングハウスにほぼ限定されていた。ところが、いくつかのロングハウスの成員が集まって、家族ごとの家屋で暮らす定住集落が形成されると、日常的に接触する人びとの数が飛躍的に増大した。集落の規模は100人を超えるまで大きくなった。また、襲撃が停止され平和が訪れたことにより行動域が増大し、それまではほとんど接触のなかった人びと、言語集団の枠を越えた人びととの交渉も増えていった。その結果、言語集団の範囲を超えた通婚もみられるようになった。言語集団内での社会的交渉のみならず、言語集団間のそれも大幅に増加することになったのである（Shaw 1996）。

本稿の調査地であるシウハマソンは、ノマッド政府出張所の北約15km に位置する、クボの 8 つのロングハウスの成員が集まってできた定住集落である。家屋は、ロングハウスを小型化したものもあるが、政府が推奨した、内部がいくつかの部屋に仕切られたものの方が多い。なお、ロングハウスの構造については、須田（2021）を参照していただきたい。クボの基本的社会集団は核家族だが、その上位には父系クラン（オビ）があり、これが外婚単位となっている。女性のオビへの帰属は、婚姻後も変わらない。

シウハマソンには1988年には29世帯110人前後、1994年には35世帯130人前後、2003年には33世帯160人前後が生活していた。前後としたのは、定住集落になった後も他集落を長期間訪問したり、他集落から移入してくる人たちがいたりして、調査期間を通じて人口が変動するためである。1988年と1994年の調査時には、すべての成員が属するオビの数は17だった。2003年には、クボとは異なる父系親族集団に属するゲブシやベダミニから婚入してきた女性もいたが、中心となるオビの数はやはり17だった。世帯数の増減は、ノマッドや他集落との転出入、婚姻による独立、死亡などによる。17のオビのうちクボの南方のテリトリーに由来するのは 8 、北方に由来するのは 4 であり、他にサモとベダミニ起源がそれぞれ 2 と 3 であった。

ノマッド周辺では、集落ごとにキリスト教の宗派に集団で入信することが多い。シウハマソンには、サモやベダミニの集落よりかなり遅れて、1970年代後半に、キリスト教原理主義派のセヴンスディ・アドベンチスト派（以下 SDA）のパプアニューギニア人宣教師がやってきた。宣教師は集落での布教と同時に、一人の青年を南部高地州（当時）の都市タリに連れて行き、SDA の教えとともに初等教育と英語を学ばせた。教育を終えて集落に帰ってきた彼は、SDA への改宗とともに教育の必要性を説き、それ以降クボの子供もノマッドの小学校に就学するようになった（須田 1996）。1988年の調査時には集落のメンバーの約半数に過ぎなかった SDA はその後勢力を伸ばし、1994年には 9 割以上を占めるに至った。しかし、その後彼が死亡すると、SDA の信者は減少し、2003年には半数ほどになっていた。

SDA に改宗した集落では、旧約聖書のレヴィ記に書かれている食物規制を守ることが求められる。すなわち、蹄が分かれていないもの、反芻しないもの、水の中にいてひれと鱗のないもの、羽があって四つ脚で歩くすべての這うもの、すべての地に這うものなどが食べてはいけないものとされた。ストリックランド・ボサビグループの各集団が暮らす熱帯雨林においては、重要なタンパク源である動物はほとんどすべてこのカテゴリーに含まれる。その結果、シウハマソンでは、狩猟や漁撈に割り当てる時間が大幅に減少した。くわえて、豚の大量消費を伴う儀礼も禁じられたため、ニューギニアでは一般的な豚飼養もやめてしまった。

## Ⅲ　シウハマソンの資源利用とその特徴

クボの移動式農耕は、火入れを伴わない、いわゆる焼かない焼畑（slash-and-mulch）である（佐藤 1999）。畑にはバナナの他にアビカ（*Hibiscus manihot*）やピトピト（*Setaria palmifolia*）などの野菜や、少量ではあるがタロ（*Colocasia esculenta*）やヤム（*Dioscorea* spp.）などの根菜類も栽培されている。ニューギニアでは、野ブタが作物、とくに根菜類を荒らすのを防ぐために、木製のフェンスで畑を囲うことがよく行われている。しかし、クボの畑はバナナが中心であるため野ブタの被害を受けることはないので、フェンスを作ることはない。なお、畑は集落のすぐそばではなく、いずれも集落から徒歩で20分から 1 時間程度の距離

の斜面に作られることが多い。この他に、火入れを伴う slash-and-burn 方式で、比較的平らな土地にタロやヤムなどを主たる作物とするフェンスで囲われた根菜畑を作ることもあるが、斜面のバナナ畑に比べると、面積はわずかなものであった。

クボでは60品種以上のバナナが知られており、1つの畑には10品種以上のバナナが植えられる（口蔵・須田 2011）。品種により果実の大きさや形状、重さや数が異なっているが、もっとも重要なのは、品種による結実期間の差異である（Kuchikura 1995）。結実期間は植え付け後、品種により約半年から1年半以上に及ぶ。異なる品種を植えることで、結実期をずらしながら収穫期の延長を図っているのである。植え付け後のバナナは一度だけ結実した後枯死するが、同根から吸芽を出し、それが引き続き成長して結実するため、数年間の利用が可能である。しかし、収穫量は急激に減少し、また、下生えが成長して作業が繁雑になるため、ほとんどが2～3年で放棄される。その後は25～30年程度の休閑の後、同一の土地が循環的に利用される。収穫したバナナは炉の焚き火に直接載せて焼き、焦げた皮の部分を削り落してから、味付けなどはせずにそのまま食べられる。

シウハマソンの周辺の土地には多数の小川（クリーク）が流れており、クリーク沿いの湿地にサゴヤシ（*Metroxylon* spp.）が生育している。サゴヤシは樹高10～15メートルほどになるヤシ科の植物で、幹の中にはデンプンが豊富に含まれており、これを水さらしなどの方法で抽出し、食物として利用する。しかし、10～15年経って開花・結実した後はデンプンが変質するため、食物として利用できなくなる（大塚 1977）。側枝は移植することが可能だが、シウハマソンでは移植したものも野生のものも利用されていた。また、サゴデンプンは通年利用が可能であり、生産性も高く、地中に埋めておくと数週間保存ができるという利点を持っている（Townsend 1974）。抽出したデンプンは、塊のまま炉の焚き火に直接載せて焼き、加熱により硬く焼けた表面をはがして、味付けをせずに食べられることが多いが、マリタパンダナス（*Pandanus conoideus*）が実る9月から11月にかけては、地炉で蒸焼にした後、パンダナスの実から作ったソースと一緒に食べられることもある。

畑の作物やサゴデンプンは高エネルギーであるがタンパク質に乏しい。クボはこれまで、タンパク質を野生動物の利用で補ってきた。主要な狩猟方法は個人による弓矢猟で、おもに野ブタ（*Sus scrofa*）やクスクス（*Phalanger* spp. と *Pseudocheirus* spp.）などの哺乳類（真獣類と有袋類）、ヒクイドリ（*Casuarius casuarinus*）や小型の鳥類が捕獲対象になる。野ブタやヒクイドリ猟の場合には、森の中で足跡やその他の痕跡（ヌタ場など）をたどって獲物に接近し矢を射るのが一般的であり、獲物の追跡や追い立てに犬を利用することもある。夜行性のクスクスは、昼間にねぐらである木のウロを探し手づかみで捕まえることもある。小型の鳥類は、高い木の上部に枝や葉で隠れ場を造り、そこに隠れて近くにとまった獲物を弓矢でしとめている。弓矢の他に野ブタを対象とする丸太で作った落とし罠や、針金製の罠も仕掛けられているが、捕獲数は多くない。また、散弾銃も導入されつつあるが、散弾を購入するのがきわめて困難なため、めったに使用されることはない。

この地域を縦横に流れるクリークでは、釣りやモリ漁、漁毒漁などで、ナマズ類、ザリガニ（*Cherax communis*）などが捕獲されていた。さらに、森の中では、シダ類やカナリウムナッツ（*Canarium kaniensis*）など野生の植物と、ツカツクリ（*Tallegalla fuscirostris* 及び *Megapodius freycinet*）の卵やサゴオサゾウムシ（*Rhynchophorus* spp.）の幼虫、ヘビやトカゲなどのは虫類が採集され、人びとの食物となっていた。

シウハマソンに暮らすクボの資源利用の特徴は、利用権の柔軟性である。畑は世帯ごとに耕作されるが、土地所有はオビが単位となっている。自分が所属するオビの土地に畑を作るというのが、ロングハウスで暮らしていた時の原則であった。ところが、シウハマソンは8つのロングハウスが集まって形成されたため、ここに居住する人びとが属する17のオビのうち、現在の集落の近くに土地を所有しているのは9つ、29世帯中13世帯だけになってしまった（1988年）。そのため、原則上は半数以上の世帯は畑を作ることができなくなった。しかし、実際には土地の貸し借りはきわめて柔軟に行われており、借り方からの要求を貸し方が拒否することはないし、収穫物の贈与のような借用に伴う義務もない。また、許可を得た上で他者の畑から作物を収穫することも行われていた。

同様のことは野生動植物の利用にもみられる。狩猟、採集、漁撈に利用する土地も、基本的には自分が属するオビが所有するものでなければならないが、畑の場合と同じく、所有者の許可を得ることで他のオビの土地を容易に利用することができた。

サゴヤシの利用にも柔軟性がみられた。クボは野生のサゴヤシと移植したサゴヤシの両方を利用しているが、野生のサゴヤシの所有権はそれが生えている土地を所有するオビに帰属し、移植されたサゴヤシは移植者やその子孫の個人所有になる。サゴデンプン作りは、初日に男性が幹を倒した後は、複数の世帯から参加した数名の女性グループによって数日間をかけて行われる。これらのグループの中には、サゴヤシの所有者をまったく含まない者も4割近くみられた。また、グループの構成を分析すると、パプアニューギニアの多くの地域で報告されているような親族関係に基づいたものとは異なり、柔軟に組織されていることがわかった。つまり、サゴヤシや土地を所有していない世帯も、所有者の承諾を得たり、所有者の組織するグループに参加したりすることにより、必要な量のデンプンを作ることが可能となっていたのである。

しかし、こうした特徴は、ドワイヤーとミネガルが調査したグワイマシでは認められていない。グワイマシは、ノマッドの政府出張所から北北西に約48km離れた、ストリックランド川西岸に1986年に作られたクボの集落である。また、成員の多くは、小型の家屋ではなくロングハウスで暮らしていたという。ノマッドから遠いためか政府の干渉をそれほど受けず、ドワイヤーとミネガルが最初に調査した1986～87年には、かつてのロングハウスでの生活様式を色濃く残している集落であった。彼らは、グワイマシのサゴヤシ利用のグループは親族関係を中心に構成されており、サゴヤシを所有している親族集団に属している女性の方が、移入などにより所有権を持たない女性よりも生産量が多いと報告している（Dwyer & Minnegal 1995）。しかし、ドワイヤーとミネガルは、サゴデンプンの生産量の多い世帯から少ない世帯への分配によって生産量の差が相殺され、所有権を持たない世帯にも必要量が保証されることに注目している。このことは、彼らがバナナの生産について観察した事例にもあてはまる。バナナの栽培においても、生産量の差は生産物の分配によって相殺されていた（Dwyer & Minnegal 1992）。

サゴヤシや土地の利用についてのシウハマソンとグワイマシの違いには、どのような要因が関係しているのだろうか。かつてのロングハウスは、兄弟関係にある男性とその妻、子どもから構成されていた。そこでは、中心的メンバーのほとんどが周囲の土地の所有権を持っており、他者が所有する土地を使用する必要はなかった。ここに他のロングハウスから移入者が加わった場合、中心的メンバーがホストとなり、ゲストである移入者に食物を分配することでその生存を保証していた。そして、2～3年ごとの遊動と離合集散によりホストとゲストが入れ替わる機会が多く生じたために、一見するとゲストのただ乗りにみえる行為が、結果的に相殺されることになったのであろう。つまり、短期的には一方的な分配は、長期的には双方向の交換としての平準化の機能を持っていたと思われる。これが、ドワイヤーとミネガルがグワイマシで観察した資源利用の特徴だったと考えられる。

しかし、シウハマソンでは、政府による定住化政策により、複数のロングハウスが集合して定住集落が作られることになり、土地をはじめとする資源所有の不均衡が永続化することになった。その結果、ホストの世帯では一方的に食物を分配する必要が生じ、食物獲得活動の負担が増大していった。これは、「与え手」と「受け手」を固定化することになり、バランスを著しく崩すことを意味する。この状況を回避するため、所有権のない世帯にも利用権を拡大し、その生産を保証することにより生産と交換の不均衡を解消したと考えられる。

この解釈を支持する状況がグワイマシで生じている。伝統的なロングハウスの生活様式を色濃く残していたグワイマシは、その後は移動をやめ定住的な集落となり、メンバー構成も固定化する傾向がみられた。1995年にふたたびグワイマシを調査したドワイヤーとミネガルによると、サゴヤシ利用においては所有者と非所有者の生産量の差異は減少し、グループ構成もより柔軟になっていた（Dwyer & Minnegal 1997）。すなわち、シウハマソンでみられた柔軟な資源利用が、グワイマシでもみられるようになってきたと考えられる。

## Ⅳ　交換と平準化、そして邪術

上記の資源利用の柔軟性は、彼らの交換と分配を通した平準化へのオブセッションと、邪術と死に関する概念が深く結びついている。クボの社会的交渉の中心を占めるといってもよい交換が、人びとに強く意識され確認される場は、儀礼時における食物の交換と、婚姻時の姉妹同時交換である。儀礼時には、数家族からなるグループごとに準備された食物が持ち寄られ、他のグループと交換される。ほとんどが同じ食材を使っ

ており、交換の前と後で各グループの保持する食物に目立った違いはないが、たとえ同じ食物でも交換することに意味があるのである。

また、平準化に裏打ちされた交換は、姉妹同時交換という婚姻規則にもみられる。男性がある女性との婚姻を望む場合、ほぼ同時期にその女性の兄弟に、自分の姉妹を嫁がせることが求められる。この取り決めは、一回ごとに結ばれるため、交換のパートナーになるオビが永続的に固定化されるということはなかった。一組の婚姻において、互いが女性の「受け手」と「与え手」の両方の役割を果たすことによって、婚姻によって生じる女性の交換の債務を平準化させていたのである。しかし、都合よく兄弟姉妹が同数になることはめったにない。その場合は、同じオビの女性を交換することになる。また、かつてロングハウスで共住していたオビは結びつきが強く、場合によっては女性を融通しあうこともある。さらに、将来生まれてくるであろう自分の娘を交換要員とすることを前提に婚姻を成立させることもあった。

表1は3回の調査で聞き取った、シウハマソンの婚姻における交換の事例をまとめたものである。66例のうち、純然たる姉妹同時交換婚は7例、オビ単位の交換婚が24例、女性の代わりに婚資のように現金を支払ったものが5例であった。現金の支払いについて若干補足すると、1980年代に国際資本の石油会社が、ノマッドから当時の南部高地州にかけて原油や天然ガスの試掘調査に入ったことがあった。その時、シウハマソンから荷役夫として3人の男性が雇われた。シウハマソンで初めて婚資を支払ったのは、いずれもこうして荷役夫として雇われた3人の男性であった。その後は、姉妹のいない2人が、小さな商店の経営や友人の助けを借りて現金を支払った。

また、夫の死後に妻が前夫と同じオビに属する男性に嫁いだもの、寡夫と寡婦の婚姻、妻方の両親や親戚の多くが既に死亡していて交換の要求がなかったものが6例あった。その他に、交換を留保し、後に女児が生まれた場合にそれを相手のオビの交換要員にするという未完の事例が13例あった。さらに、当事者の男女が駆け落ち同然に婚姻を行ったものなどが11例あった。

表1　婚姻における交換

| 婚姻形態 | 事例数 | (%) |
|---|---|---|
| 姉妹の交換 | 7 | 10.6 |
| 親族集団の女性の交換 | 24 | 36.3 |
| 婚資の支払い | 5 | 7.6 |
| 交換の免除 | 6 | 9.1 |
| 交換の未完 | 13 | 19.7 |
| その他 | 11 | 16.7 |
| 合計 | 66 | 100.0 |

以上のように、理想とされる純姉妹交換婚は1割程度に過ぎない。これは、都合よく姉妹を同時に交換することが難しいことを示している。そして、同じオビの女性の交換、またはかつてのロングハウスでの共住により強い結びつきのあるオビの女性を融通してもらうことで、同時交換の義務を何とか果たした24の事例を含めても、交換が完結したのは半数に至らない。これに、婚資の支払いで交換を免じてもらった5例と交換の要求がなかった6例を加えると、ようやく3分の2弱になる。

交換が完結していない3分の1強の婚姻は、双方のオビに強い緊張関係をもたらす。かつては、そのことが原因で襲撃が行われることもあった。近年になり、政府によって襲撃は禁じられたが、婚姻における女性の交換の不均衡が緊張関係をもたらすことに変わりはない。そして、そのことが邪術の原因とされることもある。たとえば、1994年の調査で駆け落ちのようにして結婚した1例では、他の集落に住んでいる妻方の父親は婚姻に納得しておらず、周囲に不満を述べていた。その後、1、2年で妻が亡くなると、妻の父親が邪術をかけたとされた。

食物（とくに肉）や女性の交換における不均衡や遅滞は、「妬み」として蓄積していく。そして、その妬みは当事者またはその近親者の死により顕在化する。クボにおける死は、邪術の犠牲者と、その死をもたらしたとされる邪術師を殺害するという処罰によるものしかなく、邪術の原因のすべてが交換における不均衡や遅滞とされていたからである。

クボによると、世界は可視と不可視の2つの世界からなっている。可視の世界は現世の人びとの住むところであり、不可視の世界は精霊や死者の住むところである。2つの世界は別々に存在するのではなく、我々が生活している世界に重なるように精霊の世界が存在している。そして、2つの世界は時々交感し、お互いに影響を与え合うことがある。たとえば、人びとが精神に異常をきたした場合、それは精霊により不可視の世界に連れて行かれたためと解釈される。また、意図的に精霊と交感し、精霊の力によって可視の世界の出来事に何らかの操作を加えようとすることもある。かつて行

われていた治癒儀礼がそれにあたる（Sørum 1980）。この儀礼では、深夜から明け方までのダンスでトランス状態に入った治癒者が、精霊と交感して依頼者の病気の原因を探り、その対処法を伝えていた。そして、病気の原因はすべてが邪術によるものとされた。

現在では、キリスト教の影響で治癒儀礼はほとんど行われなくなったが、クボの死をめぐる観念には、不可視の世界との関わりがまだ強固に残っている。クボにおいては、人びとの死にはすべて精霊の力が関わっているとされる。もちろん、彼らも病気や事故によって人に死が訪れることは理解しているが、彼らが問題にしたいのは、何故人が病気になったり事故にあったりするのかという一般論ではない。何故特定の人間が特定の場所や時間に、毒ヘビにかまれたり、病気になったりして死んでいくのかを問題とするのである。家族に病人が出たとする。その病気になる可能性は他の人もほぼ同程度のはずである。それなのに何故自分の家族だけが病気になったのかを問題とし、そこに他者からの悪意と精霊の力を読みとるのである。

邪術に関する詳細は別稿に譲るが（須田 2021）、かつては、邪術師であるとされた者は、犠牲者の親族によって殺されてもしかたがないとされていた。容疑者と断定された人間は、犠牲者の親族から死によってそれを贖うように宣告され、森の中などで一人になったときに、犠牲者の親族によって殺された。邪術師とされるのは、交換の不均衡や遅延をもたらされて相手を妬んだ者とは限らない。不均衡や遅滞をもたらした者も、相手に対するうしろめたさから邪術師になることがある。

しかし、1980年以降は、邪術師を集落で処刑することは政府によって禁じられた。そこで、犠牲者の近親者が精霊の力を借りて、邪術師に対抗呪術をかけて殺すという方法がとられるようになった。犠牲者の親族の男性は、犠牲者の死体から爪をはがし、それを精霊が住むといわれる聖地（クボの居住域を越えたシサ山の麓にある）に埋めて、邪術師に死をもたらすよう祈る。聖地から戻った男は、1か月ほど家にこもり、いっさいの生業活動から身を引く。また、その間の食事は、未婚の男性によって調理されたものでなければならない。対抗呪術は、数か月あるいは2～3年で効果をもたらし、邪術師を殺すと考えられている。

そうなると、人が死んだ場合、邪術の犠牲者なのか、それとも対抗呪術によってもたらされたのかを同定する必要が生じる。対抗呪術に即効性がないため、犠牲者の死の後に続けて邪術師が死ぬとは限らないからである。人びとによると、対抗呪術によって死んだ邪術師は口と肛門から血を流すので、犠牲者と見分けがつくという。誰かが死んで、それが対抗呪術によるものであり邪術師であったことが確認されると、その者をめぐる「妬み」と葛藤が人びとによって言及され、すでに死んだ者の中からその犠牲者と動機が確定される。定住化により集落の人口が増え、社会的交渉の場も飛躍的に増大したシウハマソンでは、妬みを生じさせる葛藤を互いに持たずに日常生活をおくることは不可能に近い。邪術師になる、または邪術の犠牲者になる可能性は誰もが持っているといってもよいだろう。

邪術師であったために死んだとされた者の親族が、そのことに納得せずに異を唱えることはない。ニューギニア高地でみられるような復讐の連鎖はけっしておこらず、双方は今まで通りのつきあいを続けることになる。これは、かつて犠牲者の親族が邪術師を実際に殺していた時にも同様であり、2つのグループはまるで何事もなかったかのようにつきあいを続けたという。クボでは、2つの死を一組とし、1つの死をもう1つの死で埋め合わせることで、死によって生じた不均衡を平準化しているとみなすことができる。

## V　資源利用と平準化志向、邪術との関わり

前述のように、平準化を前提とした過剰ともいえる交換における遅滞や不均衡は、その当事者間に「妬み」の感情を引き起こし、緊張状態を生じさせることになる。政治的リーダーがいないクボ社会では、こうした緊張状態は当事者間で解決しなければならない。そして、その解決方法は一方の当事者が集落を離れる他にはなく、その結果として、人びとは頻繁に居住地を変えていったのである。かつてのロングハウスでの暮らしのもとでは、こうして生じた避難者の移入と、2～3年に一度行われる集落の位置の変更とがあいまって、コミュニティメンバーの変動はきわめて大きなものであったと考えられる。

食物獲得のための手段をもたない移入者の生活は、かつてはホストによる食物の直接的分配によって保証された。一見、一方向的であり、不均衡を生じさせるホストからゲストへの食物の分配は、ロングハウスコミュニティのメンバーの離合集散の過程で、ゲストとホストが入れ替わることによって平準化されていた。そして、定住化と規模の増大によって、平準化の可能

性が失われた結果、シウハマソンではゲストにも資源の利用権が認められるようになったと考えられる。

しかし、食物の分配と交換が行われるのは、ホストとゲストに限定されたものではない。食物を交換することの意義は、互いの友好的な関係を確認し強化することにもあると思われる。日常的に食物を交換することで、集落内のメンバーは互いが緊張関係にないことを確認する。それは、かつてのロングハウスでも現在の定住集落でも変わらない。そして、互いの間に「受け手」と「与え手」が確定することによる不均衡を生じさせないために、所有する食物が平準化されることを望むのである。

クボにおいてすべての死が邪術によるもの、または邪術師と断定されたことによる処罰であるならば、実際に邪術を行ったかどうかは別として、邪術の犠牲者となること及び邪術師であると断定されることは、人びとの生死に関わる問題になる。邪術の対象となること、または、邪術師であると疑われることを避けるためには、他者との間で妬みが生じるような関係が構築されることを極力避けなければならない。そのために、人びとは「受け手」と「与え手」が固定化するような不均衡を生み出さないように気を配る必要がある。日常生活において頻繁に食物を分配し、移入者の生活を保証し、また、婚姻に際して女性の交換の不均衡が生じないように配慮することは、いわば、こうした平準化へのオブセッションから生じていると考えられる。

ストリックランド・ボサビグループのいくつかの集団については、政治的リーダーの欠如といった平等主義的特徴の他に、資源利用の柔軟性が以前から指摘されていた。たとえば、ショーロムはベダミニについて、土地は豊富にあり資源の利用権は土地の所有権よりも居住によって決定されるとしている（Sørum 1980）。また、ゲブシを調査したノフトも、土地の所有権は名目上相続されるが、実際の資源の利用権は居住によって獲得される傾向があるとしている（Knauft 1985）。しかし、これはストリックランド・ボサビグループの平等主義的特徴を強調するあまり、狩猟採集社会との類似性を過度に求め過ぎた結果として引き出された結論である可能性もある。少なくとも、クボにおいては、グワイマシとシウハマソンの資源利用を比較すると、居住者のすべてに利用権を認めるという柔軟な資源利用が、ロングハウスから定住集落へという変化の過程でもたらされた可能性が高い。本来は所有権者に限定されていた利用権が、集落のメンバーの固定化と集落規模の増大によって、移入してきた居住者にも認められるようになったと考えられるのである。そのきっかけは、政府により定住集落を形成することが求められたことにあるが、集落規模の増大により利用権が限定されるのではなく、利用権を開放することにつながったのは、平準化への強い志向性があったからであると思われる。生産手段の大きな違いにも関わらず、狩猟採集社会と類似した平等主義的特徴がみられることに注目したい。

このように、クボ社会の半遊動的生活（ただし、狩猟採集社会とは異なり 2 ～ 3 年間隔）、資源利用の柔軟性、権力の欠如、緊張状態解決のための離合集散、分配等にみられる平等主義的特徴は、彼らの社会に埋め込まれた平準化へのオブセッションに起因していると考えられる。そして、それは政府による彼らの生活への介入、具体的にいえば、戦闘状態の終結と規模の大きな定住集落の形成の結果、分配や交換などの社会的交渉が飛躍的に増大したことによっていっそう強化された。即時収益システムに基づく狩猟採集社会では、基本的社会集団であるバンドのメンバーの離合集散により資源利用が柔軟に行われていた。狩猟採集社会においては、バンドの変更は微小環境の認知における不慣れさを伴うかもしれないが、それ以外には大きな損失を導くことはない。狩猟採集社会の成員は、将来の食物獲得活動への大きな不安なしに、バンドを変えることが可能なのである。つまり、資源利用の柔軟性は離合集散の過程でバンドを移動したメンバーに食物を保証するという意味を持っていた。

いっぽう、遅延収益システムを基本とするクボでは、ロングハウスコミュニティの変更は、それまで耕作していた畑の放棄を伴う。他者が所有する土地で、ゲストとして生きることを意味するのである。ゲストである新規移入者は、当然ながら自分の畑やサゴヤシを所有していない。移入してすぐ、また、その後も長期にわたり、みずから食物を獲得する手段を持たずに生活せざるをえない。そこに、生産量の差異化が始まる契機があるともいえる。かつてはゲストの生活を保証するために、ホストによるゲストへの食物の分配が行なわれていた。しかし、集落のメンバーが固定化し規模が増大したために、そして、離合集散による所有者と非所有者の入れ替わりの可能性がなくなった結果、非所有者への資源の開放が行われたのである。つまり、平準化へのオブセッションが、「受け手」と「与え手」が固定化することを諒としなかったのである。

## Ⅵ　平等社会への生態人類学的視点

自然に強く依存して生きてきた人びとと自然との関係、そして、人間以外の霊長類の社会との比較をテーマの1つとしてきた生態人類学では、これまでに狩猟採集民や焼畑農耕民、牧畜民社会にみられる平等主義的特徴に注目してきた。たとえば、伊谷（1986）はルソーを念頭に置きつつ、霊長類学の野外観察と、アフリカで自然に強く依存して生きる人びとを対象とした調査の成果を集約し、原猿類から人間に至る社会構造の進化と、群れと個体の関係を、平等と不平等を軸に展望している。また、寺嶋（2004）は、伊谷に依拠しつつ、霊長類学と人類学の幅広い知見を渉猟し、平等と不平等を根源的に問い直している。伊谷と寺島の論考は、平等と不平等を考える場合には、階層化した複雑な社会に生きる我々の平等に関する観念を一度留保し、霊長類社会全体を見通したうえで個体（個人）の関係に注目する必要があることを強く示唆している。寺嶋は前掲論文において、「不平等を生成し維持するルールや制度があるように、平等を生成し維持するルールや方法、そして文脈がある。どんなにシンプルに見える社会においても平等は自然の所与として備わっているのではなく、人びとの営為の結果として保たれている」と述べている（寺嶋 2004: 44）。階層化がみられない社会においては、おのずから平等主義的特徴や平準化のメカニズムが備わっているのではなく、不平等を顕在化させずに、少しでもそれを小さくするためのメカニズムを生み出したということである。平等主義的社会においても、日常生活において個人間に優劣を生み出す契機は頻繁に表れる。狩猟採集社会における獲物を捕らえた狩猟者からその場にいる人びとへの肉の分配は、まさに「与え手」と「受け手」を顕在化させる機会になりえる。しかし、多くの狩猟採集社会では、獲物を捕らえた狩猟者がそれを誇ることなく、控えめな態度を取ることはよく知られている。クボにおいても、成功した狩猟者は獲物を集落内に運び込んだ後は、その解体と分配を他者に任せ、静かに家に帰っていった。このように、差異を顕在化させない「ルールや方法、そして文脈」、換言すれば「しくみ」を作り上げることによって、他者よりも優位な立場に立ちたいという欲望は抑え込まれることになる。そのようなしくみの1つが、クボでみられた交換や邪術と関わる平準化志向なのだろう。

クボ社会のかつての半遊動的生活、資源利用の柔軟性、政治的リーダーの欠如、葛藤を解決するための離合集散、交換と分配等にみられる平等主義的特徴は、狩猟採集社会とよく似ている。これらの特徴は、まさしくゾミアにおいて、低地の中央集権的水稲国家に抵抗する、あるいはそこに組み込まれることに抗するために、人びとの営為の結果として、平等を生成し維持するしくみが生み出されたことに類似している（スコット 2013 [2009]）。ゾミアの特徴、すなわち国家形成と収奪にできるだけ抵抗できる地勢、生業戦略、社会構造の設計は、かつてのクボ社会にもあてはまる。大パプア台地の熱帯雨林は高く険しい山塊とは異なるが、西のストリックランド川、南の低湿地、東と北の急峻な山々に囲まれ、その外側の社会との接触はほとんどなかった。多品種で、分散し、成熟期間が異なる根菜類にバナナとサゴヤシを加えれば、その生業戦略はさらに多様なものとなるし、半遊動的な居住と平等的な社会構造は、まさにクボ社会でみられた特徴である。ゾミアの諸社会は低地の中央集権的な水稲国家に抵抗するために形成されたが、クボ社会の周囲に中央集権的な社会が存在したことはない。だとすれば、こうした特徴は半遊動的な生業戦略をとる階層化しない社会の多くにみられるものなのかもしれない。しかし、それは単に生業戦略の結果として生じたものではなく、彼らの文化や社会、超自然観などと深く結びついて形成されたものである。

現在のところ、クボと国家との関わりは、小学校や保健所からのサービスなど最小限に限られているし、税も払ってはいない。数か月に一度、政府の行政官が各集落を巡回することにはなってはいるが、ヒルに吸血されながら巡回しようという行政官は多くはない。政府による医療サービスもじゅうぶんに受けられる状況ではない。クボの場合、国家に抵抗するというよりは、国家と関わりを持たずに暮らしているという印象が強い。ただし、1980年頃からは殺人や襲撃などに対する政府の取り締まりは強化されてはいる。それまではクボ社会の中で許容されていた邪術師と断定された者に対する殺人は、処罰の対象となった。それへの対応として、死に関する解釈に若干の変更を加えたことは前述の通りである。しかし、それがいつまで続くのかはわからない。早晩、国家に完全に包摂されることも考えられる。そうしたシナリオの1つは、周囲の熱帯雨林の開発が政府主導で始められ、生計維持の基盤である森が失われることにより、自給自足の生活が崩れていくことである。そうなれば、否応なく貨幣経

済にからめとられていくだろう。その時には彼らの平準化へのオブセッションはどのように変わっていくのだろうか。

## 謝辞

本稿は、文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究（研究領域提案型）「出ユーラシアの統合的人類史学―文明創出メカニズムの解明―」の B01班「民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明（研究代表者：大西秀之同志社女子大学教授、課題番号19H05735」における研究会での議論に基づいている。研究代表者、研究分担者、研究協力者の方々に感謝する。また、いくつかの重要な指摘と助言をいただいた 2 名の査読者に感謝する。最後に、新たなものの見方があることを教えてくれたクボの皆様に深く謝意を表したい。

## 参照文献

（日本語文献）

伊谷　純一郎

1986 「人間平等起源論」『自然社会の人類学――アフリカに生きる』伊谷純一郎、田中二郎（編）、pp. 349–389、アカデミア出版会。

大塚　柳太郎

1977 「サゴヤシに依存するパプア人の生態」人類学講座編纂委員会（編）『人類学講座12　生態』pp. 215–250、雄山閣。

掛谷　誠

1983 「妬みの生態人類学――アフリカの事例を中心に」『現代のエスプリ・生態人類学』大塚柳太郎（編）、pp. 229–241、至文堂。

1994 「焼畑農耕社会と平準化機構」『講座地球に生きる 3　資源への文化適応――自然と共存のエコロジー』大塚柳太郎（編）、pp. 121–145、雄山閣出版。

口蔵　幸雄、須田　一弘

2011 「パプアニューギニア山麓のバナナ栽培 (1) ――品種の多様性」『岐阜大学地域科学部研究報告』29: 53–98。

佐藤　廉也

1999 「熱帯地域における焼畑研究の展開――生態的側面と歴史的文脈の接合を求めて」『人文地理』51(4): 7–67。

スコット、ジェームス C.

2013 『ゾミア――脱国家の世界史』佐藤仁（監訳）、みすず書房（Scott, James C. 2009 *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.）。

2017 『日々のアナキズム――世界に抗う土着の秩序の作り方』清水展、日下渉、中溝和弥（訳）、岩波書店（Scott, James C. 2012 *Two Cheers for Anarchism: Six Easy Pieces on Autonomy, Dignity, and Meaningful Work and Play*. New Jersey: Princeton University Press.）。

須田　一弘

1996 「文明がやってきた――パプアニューギニア・クボの場合」『北海学園大学人文論集』第 6 号：153–166。

2021 『ニューギニアの森から――平等社会の生存戦略』京都大学学術出版会。

寺嶋　秀明

2004 「人はなぜ、平等にこだわるのか――平等・不平等の人類学的研究」『平等と不平等をめぐる人類学的研究』寺嶋秀明（編）、pp. 3–52、ナカニシヤ出版。

ハイズ、ジャック

1970 「ニューギニア探検記」『現代の冒険 1　砂漠と密林を越えて』梅棹忠夫（編）、瀬尾韶夫（訳）、pp. 115–237、文芸春秋社（Hides, Jack 1936 *Papuan Wonderland: The Story of "The Most Difficult and Dangerous Patrol Ever Carried Out" in Papua-New Guinea*. London: Blackie and Son）。

（英語文献）

Dwyer, Peter & Minnegal, Monica

1992 Ecology and Community Dynamics of Kubo people in the Tropical Lowlands of Papua New Guinea, *Human Ecology* 20(1): 21–55.

1995 Ownership, Individual Effort and the Organization of Labour among Kubo Sago Producers of Papua New Guinea, *Anthropological Science* 103(2): 91–104.

1997 Sago Games: Cooperation and Change among Sago Producers of Papua New Guinea, *Evolution of Human Behavior* 18: 89–108.

Knauft, Bruce

1985 *Good Company and Violence: Sorcery and Social Action in a Lowland New Guinea Society*. California: University of California Press.

Kuchikura, Yukio

1995 Productivity and Adaptability of Diversified Food-Getting System of a Foothill Community in Papua New Guinea, *Bulletin of the Faculty of General Education, Gifu University* 31: 45–76.

Lee, Richard

1979 *The !Kung San: Men, Women, and Work in a Foraging Society*. Cambridge: Cambridge University Press.

Marshall, Lorna

1976 *The !Kung of Nyae Nyae*. Cambridge: Harvard University Press.

Ohtsuka, Ryutaro

1987 The Comparative Ecology of Inter- and Intra-Population Migration in Three Populations in Papua New Guinea, *Man and Culture in Oceania* 3 Special Issue:

207–219.
Shaw, Daniel
1986 The Bosavi Language Family, *Pacific Linguistics A* 70: 45–76.
1996 *From Longhouse to Village: Samo Social Change*. Fort Worth: Harcourt Brace Collage Publishers.
Sørum, Arve
1980 In Search of the Lost Soul: Bedamini Spirit Séances and Curing Rites, *Oceania* 50(4): 273–296.
Townsend, Patricia
1974 Sago Production in a New Guinea Economy, *Human Ecology* 2(3): 217–236.
Woodburn, James
1970 *Hunters and Gatherers: The Material Culture of the Nomadic Hadza*. London: The British Museum.



# Mechanisms of Unstratified Societies:

## A Case Study of the Kubo in Papua New Guinea

Kazuhiro SUDA*

In the 200,000 years since the evolution of Homo sapiens, the concept of the nation came into being only about 5,000 years ago, and even until recently, there were a number of societies that lived without any connection to any nation. These include unstratified, egalitarian societies. One of these unstratified, egalitarian societies is the Kubo, who live in the tropical rainforest of lowland Papua New Guinea, and obtain food from the surrounding environment through the use of sago palm, shifting cultivation, hunting, gathering, and fishing. Their life has been strongly oriented to egalitarianism, which includes flexible resource use (extension of access rights to non-owners), sister exchange marriage, and the concept of death based on sorcery. The Kubo were subsumed into the colonial government in 1961, and until then had created an egalitarian society based on leveling mechanism. By analyzing the Kubo, I would like to focus on the mechanisms of a unstratified society.

**Keywords**
unstratified society, ethnography, leveling mechanisms, Kubo

* Hokkai-Gakuen University